

『九成宮醴泉銘』の異体（異形）字の考察

助教 周東 清芳

1 はじめに

『九成宮醴泉銘』は楷書の極則と言われ、点画・結体のいずれも超一級の作品である。これを丹念に学び書法を習得すれば書写書道生活に太く力強い筋道が一本通るはずであるが、その学習にはいくつかの障害が立ちはだかる。

まず第一に、肉筆作品でないので本来の筆勢・線質が明確でないことだが、これは多くの肉筆作品を見て練習を重ねることによって解消する。

次に、古い石碑のほとんどがもっている欠陥、つまり碑の刻面が風化や拓の採りすぎのために荒れて、刻線が損傷してしまっていることと、碑の完成時の初拓に近いものが伝わっていないことである。が、これも同じ作品の中の同じ文字や、歐陽詢の他の作品を調べればおおよその見当がつく。好運にも、歐陽詢には『皇甫誕碑』『化度寺塔銘』『温彦博碑』と、楷書碑が多くあり、比較的調べやすい。

拓が明瞭であっても知識がないと困る問題が、「異体（異形）字」に関することである。後漢の字書『説文解字』の小篆体そのものにも「異体（誤り）」が存在し、やや遡って秦代から起こった隸変（小篆から隸書に書体が移行していくときに点画や字形が変化したこと）がもとになり、多くの「異体字」が作られていった。漢字の「正体」の認識は、『干祿字書』『康熙字典』を経て、日本では現在の

『常用漢字』に至っているが、『九成宮醴泉銘』に書かれている字形（字体）は「正体」なのか「異体」なのか、書体変遷の流れの中でどう位置付けられるのかなど、学書者を悩ませる。

古典作品を学ぶ際に必ず遭遇するこの問題を、面倒くさがって避けてばかりいては文字に暗いままで、誤っているかもしれない書道（文字）の伝統をそのまま踏襲するしかない。ことに書道の世界には、文字学に暗くただ筆を揮って字を書いているばかりで、古典や師匠の書いたものに何の疑問も抱かずにいる人がほとんどではないかと思う。しかし、ここで書体の変遷や楷書の字体（字形）についての基本的な考え方や知識を身につけることができれば、不明瞭な文字のある程度正確に書け、他の書体の書を学ぶことにも役立てられるばかりでなく、書道史や文字史の世界を垣間見て、自分自身の書の世界を広げることにもなる。

さて、本稿で取り上げ考察する異体（異形）字とは、歐陽詢の書いた楷書の筆写（書写）体のうち活字体（「字典体」と「常用漢字体」）以外の漢字と考えればよい。その際、『常用漢字表』の「字体についての解説」にあるように、筆写するために『常用漢字表』の字形と若干の違いしかないものは異体字とはとらないが、書き取りの試験で「×（バツ）」がつけられそうな字形については、なるべく取り上げるようにした。

参照するテキストは、現存する最も古い拓の『李祺旧蔵本』系統の宋拓本を掲載している「天来書院」発行のものを使用し、ページ数や行数もこの本のとおりとする。拓本（図版）の一文字の大半が『端方旧蔵本』系統の本でも見えず、異体（異形）字であることが確認できない文字は取り上げない。（同一作品の中でも同一文字を同一の字形に書くとは限らず、この作品でも違った形に書いている

ものがあるからである)なお本文中の【】内の数字はページ数と行数を表す。また、拓本(図版)は五ページから始まっている。

2 『九成宮醴泉銘』の異体(異形)字

【五一一】



九

二画目の終筆はねがはらいのように曲線的に上方に抜ける。これは「觀(觀)」「也」「冠」「抗」「絶」「池」など、歐陽詢の楷書の書風の特徴の一つである。「九」については以後説明を省略する)



宮

甲骨文から楷書まで、ほとんどが上下の「口」の間の左はらいは書かないが、説文篆文(以下小篆とよぶ)ではこの一画が垂直に書かれる。字源を考えると左はらいはない方がよいと思われるが、国語的には『常用漢字表』に従わざるをえない。しかし、次回の『漢字表』の改正の際には是非とも改めてもらいたい字である。なにしろ一画少なく字形も書きやすく、字源的にも正しいのであるから、こちらの方がよいに決まっている。「ウ冠」の一画目が三画目の横画部分と交差しているが、「ノ」でない短い縦画の場合は横画にびたりと接して書くよりも、交差する程度にやや長めにする方が書きやすい。縦画のあとに横画を接して書く「其」「甚」も同じ伝である。

【五一二】



秘 (秘)

正字は偏が「示」であり、小篆・隸書をはじめ行書や楷書にも「示」にしているものが多い。『集字聖教序』や『高貞碑』などが「禾」にしているが、行・草書の「示」の見損じか書き損じが定着してしまったものであろうか。これなども次回の『漢字表』改正の際に改めてほしい字である。



書

縦画が下に突き出ている。字源どおりに上部の「聿」をそのまま書いているので、筆順も六画目が最後になるだろう。(貫く画は最後に書く)



監

小篆は「臥」と「一」と「皿」とに従う会意字でこれが正字。常用漢字の右上部分の三画目「ノ」は不要である。この「ノ」を書かないものは、草書の『聖母帖』(懷素)などがあるが、『西嶽華山廟碑』(隸書)などは「一」を書き、『蘇慈墓誌』などは二画多く書く。



檢 (檢)

「木」偏は「手」編に書いたり(縦画はほとんどがはねる)、四画目を省略したりすることがある。篆、隸書では「木」のままに書かれているから、おそらく行草体で省略変形したものが楷書に引き継がれたものであ

ろるか。旁の下部「二人」は楷書（書写体）では「四点」となる。



校

前項「検」に同じく「木」偏を「手」偏にしている。旁の四画目の点が高い右上がりの止めになっているのは、多分に行意を含み、後出の「交」の五画目の左はらいと連続して一画省略したものと相通ずるところがある。

【五―三】



鉅

旁「巨」の最終画の上に一画増やすのは隷書から見られる。矩形の定規の象形字であるからこの一画は不要だが、重心を下げて安定感をもたせるためであるうか。



鹿

最終画（普通の形では最後から二画目）を右はらいにするのは、隷書『熹平石經』『礼器碑』『孔宙碑』などに見えるし、『枯樹賦』ではこれが止めになっている。高さや暢びやかさを見せるために、隷書の筆勢を残しつつ楷書らしい字形にしている。

【五―四】



魏

旁「鬼」の一画目の左はらいは字源からして無くてもよく、ほとんどがこの画は書かない。最後の二画「ム」は「コ」にも書かれるが、甲骨文や金文には「ノ」すらない。草書の最終画が「ノ」になることも関係があるうか。



勅

左部を「来」に書くのは『礼器碑』などの隷書から。楷行草とも、筆写する（手書きの）文字はこう書く。字形の整えやすさもあって、こちらに定着したのか。縦画がはねるのは筆脈からして当然で、手書きの文字ならばねない方が不自然である。戦前の書道（習字）の教科書はほとんどはねていたはずである。『常用漢字表』の「字体についての解説」にももちろん述べられているから、これは手書きでははねる方がよい。問題は書き取りの試験で「X」をつける者が多くいることで、総理府が文部省あたりが再度厳正に指導監督をしなければ解決しない。「教科書体活字」もはねているとよいのだが。

【六―一】



維

「糸」偏の四画目の縦画がはねるのは前項の理由と同じ。ただし下部を「三点」に書く方がずっと多い。旁の「隹」の三画目の「ノ」が「フ」になっているのは、小篆体の名残であり、由緒正しい。「觀（観）」「惟」なども同様である。行書では一画目からこの画、そして左側の縦画と連続する形があり、これも小篆体の「隹」からのものであろう。



觀 (観)

左側の声符の上部は毛角と大きな目が二つずつの形であるから、このとおりに旧字で書く方が字源がわかってよい。

【六一二】



避

「辟」の右側の横画が一本多いのは、隸書『孫根碑』(隸辨)などに起原がある。

【六一三】



宮

前掲【五一二】



此

左側「止」の二画目は、篆書で書くと縦画が主となるので、この形に近くなる。四画目を右側「匕」の二画目の横画に連続させているのは、行書的。一画少なくて字形も整えやすい。

【六一四】



隋 (随)

国名の「隋」をこう書く例は多いし、旁を「有」に書くものも多く見られる。



壽 (寿)

『礼器碑』『史晨碑』に隸書ではあるが同形が見られる。常用漢字字体(略体)は、『元嘉元年画像石題字』のような簡略化された隸書や草書からきたものか。



宮

前掲【五一二】

【七一】



抗

旁「亢」の上部二画は、小篆を早書きするとこのようになる。楷行草ではこちらの方がずっと多いし、行意を含んでいる。下部の一画目も同様に、二画目の始筆に早く達する。



殿

旁「殳」の形は楷書でも様々に書かれる。隸変したときにいくつもの形で書かれ、楷書になるときにまた、それなりの形(上部が「ロ」「マ」「コ」など)になったのであろう。字源からすると、右側は「支」と書かれるべ

きである。



絶

「糸」の下部は「三点」に書く方が、行書との関連からみても書きやすい。旁「色」の「巴」の中の一画を省略するのは、隸・楷・行にも多く見られる。字源からすると、この部分は人が躡るか跪く形なので、前肢にあたるこの一画は必要だが、狭いスペースなので省略したものであろう。



壑

字源より二画少ないのは、スペースの狭さのためであろうか。左上部を「害」につくる異形同字もあるが、やはり横画を一画減じているし、六画目からの「谷」の部分も「石」につくるものもある。『伊闕佛龕碑』などは、構成要素はそのままだが、配置を変えて右側に「又」「土」を縦に並べて左上部を左側縦一杯に伸ばして、スペースを広げる工夫をしている。



為

一画目の「丿」が、やや右上に長く払われていて、行書の形に似て二画目と連続しているように見えるが、連続させる用筆も難しいので【十四一四】のように書くべきであらう。

【七一二】



跨

最終画を、横画二本を貫く縦面にしてている。他に「手」などに書くものもあるが、書きやすくもあり、高く聳え立つような視覚的效果もある。字典体が字源どおりの正字である。



楹

旁「盈」の三、四画目の「又」を「メ」に書いている。狭いスペースなので、「フ」の横の部分を省略しているのであろう。



分

早くも隸書からこの筆順で書かれているものがあるが、これは筆順の大原則（左から右に書く）からしてもおかしくはない。行草はほとんどすべてがこの筆順で書かれ、『九成宮醴泉銘』もこの流れを汲む。「人」と「八」を速書きするとき、それぞれを区別するためには当然であろうが、「刀」の形が見えなくなるのが難である。



巖（巖）

小篆体は縦長すぎる。隸書に「山」を左に移動したものがあがるが、行草や楷書にはあまり見受けられない。『九成宮醴泉銘』では、文字の構成要素そのものが縦長気味なので、左に移動した隸書の形を採ったものと思われる。

【七一三】



闕 「門」の内部(声符)左側は、「羊」に書くのが隷書以来の伝統である。楷書では様々に書かれる。



高 (高) 上の「口」を「梯子」に書くのは甲骨文からである。行書でも楷書でも圧倒的にこちらの方が多いし、字形も整えやすい。



建 隋唐以前の楷書は、「廴」の上に「丿」を加えるかしんのように書くものが多い。「廴」(儀礼を行う廷の障壁の形)としんによう(道を行く)では字源がまるで違うが、類形を書き誤ったものであろうか。隷書ではあるが『石門頌』には同形が書かれている。

【七一四】



起 「走」の下部は行書と同様にこの形に書いている。「之」と同じ字源要素で、一画目がすぐ上の横画からの連続で、省略されたものである。「足」【九一三】

「越」【十二一】「趨」【三十二一】「凝」【四十一一三】が同形を見せる。旁は「巳」が正しく、「巴」は『説文解字』の誤りらしいが、小篆以降ほとんどがこれに倣っている。字典体がまちがっていて、常用漢字体が正しいという珍しい例である。終筆のは

ねは隷書の単体からきているもので、楷書では止めにするのが通例で、収まりもよい。



葛 「草」冠は四画で書かれている。「臺」を四画で書いている。「曷」の下部は、隷書以来「匕」と書くことが多い。



臺 (台) 「台」の字典体(旧字体)である。「高」の省形と「至」とからなる、建物の占地のために矢を放つて卜することの意をもつ会意字で正字である。「台」の方は、口で俺と言う意の形声字であるが、同音のために借用された。

【八一二】



榭 中央部「身」の三画目の横画の部分が一画目の左はらいとの重複を避けて省略されている。



參 (参) 下部の「彡」を「小」に書いている。隷書『曹全碑』『史晨碑』はこの形で書かれる。



視 「示」偏が、そのまま「示」の形と筆順で書かれる。『九成宮醴泉銘』の「示」偏は、すべて五画で書かれる。



造 隣の中央部「刀」が「ク」の形に書かれる。「照【八一四】」も同様である。「ソ」に書かれることもあり、隷書以来の形である。

【八一二】



尋 中央部右側「口」の一画目を垂直に書き、安定感を持たせている。また、同じ中央部左側の「エ」を「コ」に近い形で二画に書き、この垂直の画の邪魔をしていない。『集字聖教序』『蘇慈墓誌』などもこれに近い形で書かれる。



臨 右側上部は「人」であるから、常用漢字体や隷書『西狭頌』『石門頌』のような形が字源的に正しいが、他の隷書碑や楷書碑の大半は「上」の形に書かれる。字源を知らなければ「上」が字源的に正しいものと信じてしまうかもしれない。



崢 隣の長く貫く横画を短く書いている。偏「山」の位置の高さと相俟って一字全体の高さを強調している。

ている。

【八一三】



壁 「壁【一九一二】」と同様に「辛」は横画を一本加えて書くことが多い。「巖【七一二】」もそうだが、縦長になりすぎてしまいそうな字の、上部または下部を横に持つていき、収まりをよくしている。とくに『九成宮醴泉銘』は文字の構成要素から縦長気味であるから、こうしないと収まりにくい。「玉」には、もともと「丿」はない。



交 四、五画目を連続させるのは、行書からきているのであろう。楷書でも『蘇慈墓誌』『智永千字文』に見える。



映 正字は常用漢字体で、これは六朝以降にできた字形ではなからうか。音の「エイ」に導かれて「英」を旁にもってきた俗字である。「央」を六画で書くのは、小篆体を見ると不自然ではなく、この方が字形を整えやすい。漢隷はほとんど六画で書いている。

【八一四】



照

「遼【八一二】」参照。

【九一一】



霞

脚は「段」が正しく、「段」と書くのは「段」との混同であろう。「ヨ」を「マ」と書くことによって高さを感ぜさせる効果がある。



蔽

脚部「蔽」の四画目の縦画を短く、五画目の折れたあとすぐに短くはらうことによって、重心を上げてすっきりさせている。「蔽」「幣」「弊」なども、このような字形にしているものが多い。小篆体をそのまま楷書体にするのは無理があるので、この程度は書き取りで「〇」にしてほしいところである。



虧

「説文解字」の別体にこの字形がある。右側の意符は「亏」が正しく、正字は「虧」となるべきであり、「字」「紆」などの「于」の部分はみな字源が「于」である。「于」は曲がつた形をつくる添え木の象形字なので、縦画が直線であるのはおかしい。



觀

前掲【六一二】



其

「宮【五一二】」で述べたように、縦画を長めに書いておくと、後で継ぎ足さなくて済む。字源とはまったく違う形になるが、これが行書、楷書の字形の整え方である。

【九一二】



廻

「高【七一三】」と同様、書きやすい形になっている。いる。



澗

「間」の正字は「月」と「門」との会意字である。「さんずい」の二、三画目が連続して行書的である。



窮

脚部左側「身」は、「樹【八一二】」と同じ伝。右側「弓」は三画目の始筆（起筆）が、二画目の終筆（収筆）部分から連続して書かれてすっきりとしている。字源からすると少しおかしいところがあるが、速く書ける利点まである。



王羲之には多い。

極

「木」偏の四画目が狭いスペースのために省略されている。最終画が「木」偏の下にまで伸びているが、これは隷書には無く、行草にはかなり多く書かれている。

【九一三】



從

「起【七一四】参照。

足

「起【七一四】参照。



【九一四】

於

鳥の羽を解いて繩をかけたわたした形の象形字。

隸変するときに『曹全碑』『乙瑛碑』のような字形にならずに、『石門頌』『史晨碑』のように「於」の形にしたものが、草書や行書に受け継がれて楷書にいたったのである。ちなみに『曹全碑』などの左側は「于」の形になっているが、「方」より



景

はましであろう。平仮名の「お」と片仮名の「オ」の字源にまでなつてしまっているものを、今から変えるのも厄介である。

隸書以来「口」を「日」に書いたり、「日」を「口」に書いたりする。また、この字の「京」の部分の一画目を省いたり、横画と交差させる「左はらい」に書いたりもする。この場合は、一画加えることにより高さを出しているのである。



流

右側の一画目を省略するのは、字源と違うが非常に多く行われる。

【十一一】



無

一、二画目を連続させている行書的な字形。下の横画を最も長く書くのが一般的で、それにつれて筆順も縦画四本を書く前になる。



鬱 (鬱)

蘇軾や呉昌碩が小篆と同じ骨組みの字形を書いているが、大半は『九成宮醴泉銘』と同じ字形に書く。下部左側は草書体の「即」の左側と同じことから書かれたものであるか。



氣 (氣)

一画目の収筆をはらわずに二画目の起筆に向かつて返すようにし、二画目の収筆を左下にはらって、多分に行書的である。「撫【十一一四】」
【無【二十一三】】にも見られる。



微

長髪の巫女(媚女)を殴ち、その呪能を失わせる儀式を道路において行う意。つまり、中央下部は「ル」ではなくて「人」である。小篆体を行書風に書くとこの形に近くなる。常用漢字体よりは字源に近い。なお、「瑞【二十九一三】」同様、「山」は本来長髪がなびく形なので、縦画の部分を斜めに書かないと、どこかのバンドのメンバーのヘアスタイルのようなものである。

【十一二】



徐

「塗【十九一二】」と同様に、行書でも縦画を上に出すのがほとんどである。



淒

「崢【八一二】」「事【十八一二】」と同様に、他に長い横画がある場合、重複を避けて短く(突き出さずに)書く。ことに「女」が縦に並んだ場合は、その横画のみを長く書くと、文字が引き締まり、また暢びやかに見える。

ここでは「女」を四画に書いている。

【十一三】



涼

「景【九一四】」参照。



安

「宀」の一画目を三画目に書いて「女」と連続させ、一画省略している。古典では隸書からほとんどこの形に書かれる。



體 (体)

「骨」の上部三、四画目を「人」の形に書く。隸変からのことであり、書きやすい形である。



佳

旁は「土」を二つ重ねずに、縦画が短い横画三本を貫く形にした方が字形も整えやすいし、一画少なく速く書ける。



所

隸変してから、筆写体はこの字形であった。変体仮名の「そ」もこの字形を字源とする。

【十一四】



養

「羊」の縦画を左はらいにし、「食」の一画目と繋げて一画減じる。「食」の一、二画目の左右のはらいを分離させて書く「常用漢字体」などより、はるかに合理的で美しい。



神

偏を「示」に書く。



勝

隸書で旁下部を「分」に書くものがあり、上部も「米」に似た形なので、草書、行書とこの形に書くのがほとんどである。



漢

旁上部の「草」冠は四面に書くことが多い。旁の下部は隸書では「ハ」の形か、「四点」にする。他の楷書は六朝からほとんどが「人」形になる。行書が縦画と左はらいを連続させたものを承けたのだろうが、この『九成宮醴泉銘』だけは隸書の古さを残して安定させている。

【十一一】



能

隸変からこの形に書くのが普通である。「匕」を重ねるよりずっと書きやすい。

【十一二】



爰

小篆体や字源からすると、「字典体」でよいのだが、『集字聖教序』などは中央の短い縦画と下部の左はらいとを分けて書いている。王羲之を学んでいたからこうしたものか。



弱

左側の「二点」を「レ」に書いているのは行書的である。



經

漢碑『史晨碑』にこの形がある。上部を「又」に書くのは、これの行書体である。

【十一三】



營(營)

下部「呂」は「宮【五一二】」と同様「口」を二つ縦に並べるだけで、真ん中の左はら

いを書かない。



逮

魏の鐘繇が同じような字形で書いている。まるで違った字形に見えるが、貫いている縦画を、横画と交差させないようにしているだけである。

【十一一四】



臨

前掲【八一二】



兆

『説文解字』の小篆は七画で、隸変してこの形になって六画になり、字形もすっきりして書きやすくなった。



武

字源からして一画目も当然七画目の反りと交差するし、古典の行書と楷書はほとんどがこう書かれている。

【十二一】



壹 (壹)

『常用漢字表』の旧字体「壹」よりも、同じ字典体のこちらの方が見た目にも安定している

し、字源にも似ている。この字形の草書体から「壹」になったのであろうか。



海

【無【十一一】】参照。

【十二一】



懷

スペースが狭いので、旁下部の「衣」の二画目の点を省く。



遠

旁「袁」の中央部「口」は、篆隸の筆順から「ム」と書かれ、その二画目と次の左はらいとが一体化したもので、字形も整えやすい。「口」を「ム」に書くのは、「損【十八一三】」「國【三十四一三】」などに見られる。



越

「走」によぶは「起【七一四】」「足【九一三】」などと同じ。「戌」の一画目をはらうのは、『史晨碑』にも見える。

【十二一三】



南 内側の「ソ」が横画と交差するのは、「雨」冠にも見られる。横画の下のスペースを引き締めるためであろうが、同字【二十一】は交差させていない。



踰 字源からすると、最後の二画は針であるから折り曲げる必要はない。字典体は小篆体に倣ったままであろう。



徼 「彳」は「イ」と書くことがある。中央下部「方」の一画目は省略している。「激【二十五―四】」も同様である。



皆 上部「比」の四画目をはねずに止めるのは、楷書に共通し、字源の「人」を並べる形に合っている。下部「白」の一画目のはらいを書かないのは、字源「日」のとおりである。



獻 (獻) この字は不鮮明なので、【二十九―四】で考察する。

【二十一―四】



贄 「勢」「熱」のように、「執」が上部に位置するときはこの形になることがある。行草の字形からきているのであろう。



譯 (訳) 「幸」の下部は「壁【八一―三】」「壁【十九―二】」と同様に、横画を一画増やす。

【十三―一】



暨 上部左側一画目と右側二画目は、楷書や行書では省略されることが多い。隸書でも一画目は書かない。



臺 前掲【七一―四】



拒 「鉅【五一―三】」参照。

【十三―一―二】



闕 前掲【七―四】



列 二、三画目を連続させるのは「彼【二十一―四】」と同じく行書的である。



縣（県） 隸書から「目」の次の「」の縦の部分ほとんど書かない。

【十三―三】



氣 前掲【十一―一】



淑 隸変からこう書かれる。「」がひとつ右に出ているのは、スペースがないためか。

【十三―四】



迹（迹） 楷書では略してこう書くのが一般的である。「しんによう」を行書的に、「えんによう」に近い

形に書くのは稀である。



安 前掲【十一―三】



遠 「口」の変形した「ム」と次の左はらいを離して書いている。同字【十二―二】参照。



肅（肅） 縦画を上突き出さずに書いているのは、漢隸『西狭頌』にあり、行草にも見られる。

【十四―一】



靈（靈） 「巫」の「人」を「二点」に書いている。同形が『化度寺碑』に見られるほか、『雁塔聖教序』では連続させて行書的に書いているが、他にはあまり見受けない。



畢 下の横画を省略しているのは隸書からで、行書も楷書もこの字形である。

藉

「草」冠は字源のように四画に書くことが多い。

【十四一】

儀

「我」を左右に分かつ。行書からきたものか、『雁塔聖教序』なども

【十四一三】

慮

隸変から「虎」冠はこの「雨」に似た形に書く。「獻（猷）」【十二一三】参照。

身

「樹（八一）」「窮（九一二）」参照。

物

「無【十一一】」参照。

【十四一四】

櫛

「節」の「竹」を四画の「草」冠のように書いている。こう書くのは、隸書以来非常に多い。「草」と「竹」の小篆体は「葉」の向きが上下逆になっているだけである。

【十五一】

憂

「心」の最後の「丶」と「攴」の一画目の左はらいを連続させている。行書的である

疾

「矢」の一、二画目を連続させている。「物【十四一三】」参照。

堯

「常用漢字体」の「晧」の旁と、「字典体」の「堯」の中間的な字形である。

【十五一二】

腊

「昔」の上部「草」冠に似た部分は四画に書かれている。



甚

「其【九一〇】」参照。



禹

小篆体から五、六画目が交差する。「離【十六一三】」「萬【二十六一四】」も同じ字形（部分）に書く。

【十五一三】



胼

旁が「併」のように、「常用漢字体」と同じになっている。すっきりしている。



胾

旁の形は隸書からきていて、楷書にもあることはあるが、行草にその連続形が多く見られる。



屢

「婁」の上の「口」を貫いている横画が、「二口」の間に移動して書きやすくなりすっきりした字形になっている。

【十五一四】



猶

「其【九一〇】」参照。
旁の下部「酉」の四、五画目は、字源を考へても二画とも縦画にした方がよく、曲がっていた部分を横画一本に替える



爰

前掲【十一一二】



京

「景【九一四】」参照。

【十六一二】



每

「海【十二一二】」の旁参照。



弊

「蔽【九一〇】」参照。

【十六一二】



建

前掲【七一三】



離

「禹【十五一三】」「觀（觀）【六一一】」参照。



宮

前掲【五一二】



養

前掲【十一四】



惜

「腊【十五一二】」参照。



産

「生」の左はらいを省略して内側をすつきりさせている。『韓仁銘』『曹全碑』などの隷書に見られる。



閑（閑）

この形の他に、「オ」を「下」や「午」にかくものがあるが、どれも小篆体の見誤りかこじつけであろう。



拒

「鉅【五一三】」参照。



肯

『説文解字』には「月」が載っており、骨に密着している肉の形と解説されている。しかし、「肯」

も『説文解字』以前、楚の諸器に載っている字形である。『九成宮醴泉銘』のものは、この両者の合成された形となっている。



従

前掲【九一三】



隋

前掲【六一四】

【一七一二】

【一七一二】

【一六一四】

【一六一三】



多い。

氏

「民」同様に、右上に「ノ」を加えることが



舊(旧)

かなり思い切った変形を施している。『皇甫誕碑』にも似た形があるが、どちらも「隹」

の二画目を下まで伸ばして、柱のようにして安定感を与えている。

「臼」は左右に分けているが、この形か「旧」に作ることが多い。

【十七一三】



宮

前掲【五一二】



營

前掲【十一一三】



於

前掲【九一四】



曩

「遠【十三一四】」参照。

【十七一四】



惜

前掲【十六一四】



毀

「臼」は「舊(旧)【十七一三】」を参照。「爿」

は「ク」「一」「爿」と書いて三画も多い。上部の「厶(シユ)」（投げ槍）を「楷書化するときになつたもので

あろう。

【十八一三】



事

「淒【十一一二】」参照。



因

「大」を「コ」「ユ」「土」「火」などに書くことがある。『史晨碑』『西狭頌』では「エ」になっている。隸書からとも、行草書からとも考えられる。



循

旁「盾」の二画目の左はらいを、垂直に、「イ」の次に書いてある。『九成宮醴泉銘』が全体として謹厳崇高な感じをもつのは、こういう画の存在が大きい。

【一八八―二】



改

側「己」の三画目を「レ」のように書き、右側の「文」の邪魔にならないように行書的にしている。本来「巳（蠱虫）」と「支」との会意字であるから、三画目の起筆は一画目と接するように書くべきであろう。



於

前掲【九一四】

【一八八―三】



樸

上部が不鮮明だが、旁下部に異体が見られる。『石鼓文』なら「常用漢字体」になるだろうが、小篆体では中央縦画が下まで伸びており、この字形になる。



損

「遠【十三一四】」参照。



損

前掲【一八八―三】

【一八八―四】



甚

「其【九一―】」参照。



其

「損」では『龍藏寺碑』『伍道進墓誌』がこの形をとる。『曹全碑』などの字形からこうなったと思われる。



其

前掲【九一―】



頽

隸変以来ほとんどがこの字形で、『孔子廟堂碑』もこう書かれている。



雜

（雜）

天来書院刊本の「字形と筆順」欄の解説は、四画目が【三十九―四】の同字のように軽く曲がついているとしているが、『端方旧藏本』系統の拓本を見ると、折れている。この左上の部分は「衣」で、書きやすいように「人」を二つ並べる。それが更に簡略化され変形したのである。右側の「隹」については、「觀（觀）【六一―】」参照。

【一九一―】



墀 「遲」と同様に、旁は『礼器碑』などの隸書から「尸」と「羊」を書くのが普通である。



間(間) 「日」でなく「月」につくるのが正字であり、「常用漢字体」は俗字とされる。



粉 「分【七一二】」参照。

【一九一三】



壁 「壁【八一三】」参照。



塗 「徐【十一二】」参照。



泥 楷書では「匕」を「工」に書いて安定させる字形がほとんどである。



玉 一、三本目の横画の間に「丶」を入れると、その空間が間延びするので、三画目の横に書いている。『孟法師碑』もこうして締まりのある字形にしている。『説文解字』の古文の形がヒントであろうか。



砌 「七」の二画目を右上にはね上げずに、ただの横画にして、「刀」の左はらいと紛れることを避けている。王羲之の行書にはこう書いたものがある。

【一九一三】



於 前掲【九一四】



土 小篆体を見ると、「丶」を書くのは正しくないことになるが、甲骨文には「丶(点)」がいくつか刻かれて(書かれて)いるものがある。隸書では「土」を同形に書くようになってから、判別のために「丶」を加えたといわれる。



階 「皆【十二一三】」参照。



於
前掲【九一四】

【一九一四】



瓊 「字典体」は旁の下部が「攴」になっているが、小篆体は「攴(攴)」であるから、この方が正しい形といえる。隸書以来「攴」の二、三画目を連続させて書く。



觀
前掲【六一一】



麗
「鹿【五一三】」参照。

【二一一一】



鑒 (鑑) 「皿」に相当する部分を「二点」に書いている。同字【二六六三】は省略せずに書いたものである。



於
前掲【九一四】



既
「暨【十三一一】」参照。



往
『熹平石經』や行草書のほとんどは「主」の「画目の「ノ」と縦画を連続させて書く。



察 「察」の一画目が省略されている。『蘇慈墓誌』などは「ノ」も一画省略している。

【二一一二】



卑 上部は円形の柄杓の形であるから、「甲」の上部に「ノ」をつける必要はない。よって一画目の「ノ」は除去しなければならない。



儉 (儉) 「儉(儉)【五一二二】」参照。

垂

垂 隸変してから下部を「山」のようにするこの形に書くことが多い。画数を増やして重心を低くし、安定感をもたせようとしたものであろうか。

訓

訓 隸書では字形を安定させるために最終画を右に大きくはらうが、『集字聖教序』などを経て、楷書に受け継がれている

於

於 前掲【九一四】

後

後 右側の三、四画目の連続。「憂【十五一一】」の「心」の四画目の「丿」からの連続と同じ伝である。

【三十一三】

昆

昆 「皆【十二一三】」「北【十三一一】」参照。

此

此 前掲【六一三】

所

所 前掲【十一三】

無

無 「氣(気)【十一一】」参照。

【三十一四】

為

為 前掲【七一】

彼

彼 旁「皮」の三、四画目を連続させる、行書的な運筆。

竭

竭 「葛【七一四】」参照。

【三十一一】

享

享 「高【七一三】」参照。

其

其 前掲【九一二】

【三十一一三】

昔

昔 「腊【十五一三】」参照。

沼

沼 「刀」はこの他に「夕」にも書く。「遠【八一三】」参照【八一四】参照。

【三十一一三】

引

引 「窮【九一二】」参照。

澗

澗 前掲【九一二】

宮

宮 前掲【五一二】

【三十一一四】

本

本（本） 隸変以来「大」と「十」を書くこの字形が整えやすく、正俗の別にやかましい顔真卿でさえ『多宝塔碑』にこの字形を残している。

無

無 前掲【十一二】

物

物 前掲【十四一三】

既

既 左側の「丿」と右側の二画目の短い縦画を省略して、より行書的なものになっている。同字【二十一】参照。

【三十一一三】

所

所 前掲【十一三】



致

「支」はもともと「攴」（踵を地面にびたりとつけた形で、動かない意）と、その上に「人」が立つ形だったのが、「攴（支）」に改められたものである。二、三画目を連続させているのは、「彼【二十一四】」の旁「皮」と同じ伝。



懷

前掲【二十一二】

【二十一三】



忘

「亡」は、人または屈肢された死者が「レ」（物陰）に隠れる（置かれる）形であるから、二画目の横画が「レ」に長くかぶつては意味をなさない。唐以前の書にはこの二画目の長いものは少ない。



粵

「舌」は「子」と書くのが一般的で、書きやすい。「虧【九一】」参照。

【二十一四】



朔

「朔」はこの他に「羊」「丰」などに書かれる。もともと「朔」は「人（大）」の倒形であるから、四面も

あれば書ける文字である。これほど面倒な形でなくてよく、例えば「Y」に横画を一本足す形でよい。

【二十三二】



亥

隸書からこう書かれる。



宮

前掲【五一】

【二十三二】



厯

漢隸以来こう書くことが多く、「止」は行草的である。



覽

（覽）

字典体（旧字体）から一画減じて書かれる。



臺

前掲【七一四】



観
前掲【六一一】



歩
左右の趾を重ねた形であるが、『雁塔聖教序』もこの形につくる。行草に多い形のように「少」の右側の「丿」は、字典体と同様に書かないものが正字である。

【二十三―三】



陰
楷書ではほとんどの形に書かれ、字形の安定を図る。



躒
「艸」冠は行草からこう書かれる。



高
前掲【七一三】

【二十三―四】



厥
「夨」はこの形にも書く。「闕【七一三】」「朔【三十二―四】」参照。



土
前掲【一九―三】



微
前掲【十一―】

（以下次稿）